

天理教の海外伝道を考える上で、日本国外の人々へ天理教の教えをどのように伝えるかは重要な課題であるが、同時に外国の人々が、天理教の教えをどのように受け止め、理解するかということも、十分に考慮されるべき事柄であろう。私たちの日常生活での何気ないコミュニケーションにおいても、伝える側の意図と受け取る側の受け取り方に差異が生じることは少なくないが、言葉、文化、生活習慣などが異なる国や地域においては、その度合いがさらに大きくなる可能性がある。またそれは歴史的な背景や日本との関係性にも影響される場合もあろう。

数年前のことになるが、筆者が所属するある研究会の例会で、天理教がどのように理解されているかについて考えさせられる機会があった。その例会で一人の研究者が、戦後のハワイにおける神道の復興に関連する発表を行った。アメリカ合衆国公文書記録管理局（United States National Archives and Records Administration, NARA）が所蔵する公文書に基づいて、ハワイ金刀比羅神社の資産返還訴訟について検討したものであった。天理教は主な話題ではなかったが、その公文書には天理教に関する記述もあり、報告のレジュメには以下のような記述が含まれていた。なお、カッコ内の英文は、レジュメの記述に該当すると考えられる部分を筆者が原本から抜粋した。

- ・「天理教は日本の世界支配を説く。」（In the Holy Scriptures of Tenrikyo, probably the least nationalistic of all the Shinto sects—or at least one of the least nationalistic—are indications of the Japanese governmental influence on Shinto. I quote below a few verses to indicate the idea of world domination as expressed in Shinto. "Hereafter Japan shall command foreign powers, All of you, do note it well."⁽¹⁾）
- ・「天皇に対する忠誠と愛国心を重視し、天皇崇拜が強い。」（patriotism and obedience to the Emperor and Imperial ordinances.⁽²⁾）
- ・「天理教、中山みき教祖、いわゆる日本の Christian Science」(Tenri Kyo (Divine Reason Teaching), the so-called Christian Science of Japan. Founded by a woman, Mrs. ZAMBEI (英文ママ) NAKAYAMA (nee MIKI MAEKAWA, 1798-1887)⁽³⁾）

発表後の質疑応答の中で、その研究者より筆者に対して「当時、天理教は日本の世界支配を説いていたのか？ 天理教は日本の Christian Science なのか？」との質問があった。筆者は、その公文書の原文を精査する必要があると前置きした上で、天理教は日本による世界支配を説いていないこと、また女性が教祖であり病氣治しをおこなっていたことなどから、天理教は、クリスチャン・サイエンスと似ていると言われることがあった、と返答したと記憶している。

その後、他の質疑応答が活発に継続したため、筆者はそれ以上に深く考えずに終わった。またその公文書が作成されたのは戦前であり、天理教の歴史におけるいわゆる「革新」の時代に作成されたものであることから、当時の状況からすると、天理教に関するそのような誤解があったことは十分に考えられると思った程度であった。しかししばらくして、アメリカでの日系人戦時強制収容政策に関する公文書資料を調査している中で、似たような記述が散見することに気がついた。天理教や天理教

関係者、また天理教の教えについての記述を読む中で、天理教は当時どのように理解され、このような公文書で記述されたり、あるいは新聞などのメディアで報じられてきたのかをもっと深く知る必要があるのではないかとの思いが強くなった。前述したように、天理教の海外伝道において、だれが、なにを、どのように伝えるかは大切な事柄であるが、これまで伝えられてきたもの、あるいは伝えようとしたものが、どのように受け止められてきたかを知ること重要であると感じたのである。

天理教内でも、教外者による天理教研究については、これまでもさまざまな検討がされている。主な研究としては以下のものが挙げられる。

- ・中西喜代造「外国文献に現れた天理教」1～32『天理時報』昭和6年（1931）1月1日～同年9月10日。
- ・富永牧太「外国人の天理教研究—文献を中心として—」『日本文化』第11号、昭和12年（1937）10月、171～193頁。
- ・飯田照明「欧米人による天理教の研究—文献を中心として—」『やまと文化』第50号、昭和45年（1970）3月、135～169頁。
- ・大久保昭教『外国人のみた天理教』天理教道友社、1973年。特に、最後に挙げた大久保昭教氏の著作は、それまでの研究を網羅したものであり、かつ代表的な研究における特徴とその内容に関する批評的なコメントが述べられており、この分野での代表的な文献といえる。その巻末には、主だった研究者による天理教研究の文献リストがあげられている。

おやさと研究所が毎年発行している『Tenri Journal of Religion』に掲載されている論文など、天理教に関する英語で書かれた論文のなかにも、教外者がみた天理教という観点から論じられているものがある。また、宗教学や宗教社会学を専攻する大学院生が、修士論文や博士論文で天理教について取り上げることは、戦前から現在に至るまでしばしばみられる。

さらに、大久保氏は『外国人のみた天理教』の巻末にまとめた天理教研究の文献リスト「—天理教に関する欧米文献—」への付記として「以上主なものを列記したが、このほかにも新聞、雑誌に掲載されたものは数多いが、ここでは割合した。」と述べている。天理教について英語で記述した新聞や雑誌は数多くあり、すべてを網羅し、検証することは容易ではない。しかし、そのような英語の文献にあたることは、その時代や地域の人々が天理教をいかにとらえ、理解していたのかを知る上で非常に意義あることだと考えられる。そこで本連載では、宗教学者などの研究者による専門的な著作や学術論文ではなく、主に海外における英字新聞や雑誌、あるいは政府公文書などにみられる天理教についての記述に注目していきたい。

[註]

- (1) R. J. Main, "Shinto Religion in Hawaii," March 16, 1940. NARA, RG60, E146-10, Box5., p. 11.
- (2) John Sterling Adams, "Shinto Sects in the Territory of Hawaii," December 29, 1942. NARA, RG60, E146-10, Box5., p. 22.
- (3) *ibid.*, p. 18.